

幼児の音楽性について

— 音楽概念を中心として —

大 山 美 和 子*

(昭和62年10月30日受理)

要 旨

現行の幼稚園教育要領の保育内容領域「音楽リズム」において、音楽は表現活動として位置づけられている。音楽の早期教育の重要性は古くから主張されているが、幼児期の音楽表現は、大人が行なうような演奏を指しているのではないことは言うまでもない。

近年、幼児教育の場でも音楽が盛んに扱われ、その内容はより高度化し、画一的な傾向になっている。一方、幼児期の音楽経験は幼児の日常生活からの音楽化を考慮する必要がある。しかしこれは音楽としての感情と共に生活感情が含まれるために音楽的要素が欠けてしまう結果となり易い。このような現況の中で、幼児の成長発達を踏まえながら音楽をどう取り扱えばよいか、保育者にとっては大きな課題となっている。

本研究は、幼児に学齢期前音楽基礎能力テストを実施することにより、身体的運動のバランス、リズム感、耳の基礎的な発達について実態調査を行ない、幼児がもつ音楽的背景について検討することを目的とした。

主な結果は、次の通りである。

- (1) リズム反応および身体的運動のバランスでは、音の長短識別力はほぼ全幼児に認められ、リズム感のよさが確かめられたが、リズム再現が困難な幼児が約20%と、感覚面と機能面の不均衡差が見られた。
- (2) 音高識別力はほぼ全幼児に認められ、旋律感のよさが確かめられた。しかし音高再現では、聴覚だけの場合に再現困難な幼児が50%強と、リズムの場合よりも感覚面と機能面の不均衡差が大きい結果となった。
- (3) 幼児期では身体発達的に見ると感覚と機能の不均衡差が大きい、感覚的にはリズム感と旋律感の相互関連にはほとんど不均衡差は見られなかった。

KEY WORDS

early childhood education
rhythmic response
coordination

幼児教育
リズム反応
筋肉調整

musical activity
pitch recognition
musical concept

音楽活動
音高識別
音楽概念

* 幼児教育講座

1. 問題と目的

幼児の園生活は音楽で始まり音楽で終わる、と言われている。幼児期において、幼児は直接的間接的に関わらず音楽に接する機会が多い。

現在の文部省幼稚園教育要領の領域「音楽リズム」では、幼児が関わる音楽的な活動を表現活動として位置づけ、「うたう」「ひく」「うごく」「きく」「つくる」の立場から各項目を示している。そして、幼児に興味関心を持たせながら発達段階に応じた音楽的な感覚や基礎技能を幼児の生活経験の中で総合的に育てようとするねらいである⁽¹⁾。

従来音楽と直接関わる場合、音楽活動は作曲・演奏の能動的な部分と鑑賞の受動的な部分とに大別され、特に能動的な部分においてはその役割が明確に区別されている。そのために音楽教育の中における音楽学習が、読譜力をつけるだけの手段となったり、小学校の低学年児童や幼児にとって楽譜はあくまでも二次的なものであるために音の模倣であったり、また演奏技術の訓練のみに終始する傾向が強い。Pace (1972) は「音楽を教える時、特に子どもが音楽的興味や素質を示したりすると、小さな子どもに大人のような演奏をさせたいという誘惑がある。」⁽²⁾と幼児期の音楽経験活動の中でもこの点を指摘している。さらに「これは機械的学習のくり返しを避けたいものにし、理解力や創造的思考を犠牲にして自己顯示とテクニック偏重を強調することになる。」と述べている。この言葉は幼児教育実践の場において、生活発表会・運動会等の園行事の中で、幼児が音構成の複雑な楽曲を教材とし、これを見事に演奏しているという顕著な現況と関連するものと考えられる。

一方、呉 (1987) は幼児が音楽教育を始める時期を個人差を考慮に入れても3才6ヶ月から一般的には4才、または幼稚園年中クラスが適当であることを強調してはいるものの、音楽に親しむことは早ければ早いほどよいという考えのもとに「行進やお遊戯、みんなで唱ったり、遊んだりするような内容は幼稚園や保育園に任せておいて」⁽³⁾と述べている。これは幼児教育実践の場での音楽が生活化の傾向に流れすぎて、音楽の感覚的部分のみが先行し、断片的なものに落ち入りやすく、系統性に欠けることへの指摘と思われる。

幼児にとって幼児教育の場は始めて系統性のある音楽活動を経験する場でもあることは言うまでもない。音楽は基本的には既成の楽曲を使用してその中に感情移入を計り自己表現を行なう場合と、音そのものを素材として直接自己表現を行なう場合とがある。前者は主に音楽の感性を養うという感覚的部分であり、後者は主に音楽の思考を養うという知的部分であるが、この両者が相まって音楽の創造力が生まれると考える。現在、幼児の園生活の中では「うたう」「ひく」という活動に当るものが上記した感覚的部分であり、これは結果が明確に表れるものである。Mursell (1971) は「ただうたうよろこび、聞く楽しみ、つくる興味がすべてであったら、継続的な音楽的成長はない。(中略) 音の論理的な関係を正確に理解する力がなければ、音楽はただいくつかの音が鳴っているにすぎない。従って、演奏されている音楽の構成を理解することはできない。」⁽⁴⁾と音楽の感性的なものに合わせて音楽の思考的なものの必要性を強調している。

幼児期は、感性的なものを概念化し、それを音楽的に表現すると同時に識別によって個々の概念を少しずつ広げ、質の高いものとしていく最初の経験の場である。この理解力と創造的思

考を引き出していくことは、短期間で教育的な効果が得られるものでないことは言うまでもない。大場らは「感動をもって受けとめること」と「感情を移入して表現すること」の経験活動を通して拍子、リズムフレーズ、和音、音色、強弱、高低などの音楽的要素をのぼすことがねらわれなければならないことをすでに指摘している⁽⁵⁾。

児童期や青年期と比較して幼児期の音楽活動が音楽概念という見地から研究されることは圧倒的に少なかった。Moonhead と Pond (1941) がヒルスベリー財団設立学校の幼児 3 名の音楽活動に関するデータを報告している。また Sergeant (1967) は幼児期に音楽、特に楽器に触れることの重要性を絶対音感の立場から述べている⁽⁶⁾。最近では、我国で村山 (1987) らの成長・発達に関する総合調査の中でわずかながら報告されている⁽⁷⁾。

本研究は、今までほとんど追究されることがなかった幼児の音楽概念識別を音楽的な立場から実態調査することを目的とした。音楽の表現活動を行なう場合には、視覚・聴覚・筋肉調整が各々均衡を保ちながらしかも反射的に機能することが重要視される。あわせてその各機能が音に対して識別力を備えていなければならない。今回は感覚・機能両面を通してリズム、拍、旋律に関する音楽概念識別の調査、検討を行なうものである。そして系統性ある音楽教育が始められる状況ができていのかどうか、また幼児がこれまで身につけた音楽的な背景を知るための手がかりを得ようと試みるものである。

2. 方 法

2.1 調査対象児

新潟県上越市内にある私立幼稚園より、4 才児クラスに在籍する幼児 32 名（男児 13 名・女児 19 名）である。全幼児とも保育経験 2 年目に入り、リズムに関する音楽経験活動が他園児と比較して多い。

2.2 調査時期及び調査手続き

1987 年 5 月下旬から 7 月下旬。

幼児に何か特別な事を行なっている、という感じを与えずに、出来る限り日常の保育活動に近い環境状態で調査を行なうという条件のもとに、調査実施ならび調査用紙の記録はクラス担任の保育者のもとで行なわれた。

2.3 調査内容

以下の項目についての実態調査を行なった。

(1) リズム反応および身体運動のバランス

手拍子によるリズム反応ならびに足踏み又は行進と手拍子によるリズム反応を、身体運動機能の均等状態との関連から調査。

(2) 音高の識別

長 2 度音程 (Db・Eb) 間を視覚・聴覚両面から模倣および再生の様子と身体運動機能を通して反応面からの調査。

(3) リズム反応と音高識別の相互関連について分析

なお、調査用紙は Pace (1972)⁽⁸⁾ の学齢期前の音楽基礎能力テスト (資料 I) に基づき作成したものに記録した。調査判定の基準は以下である。

- ++ 1回めで正確にできた。
- + 多少難しさがあったが、1回ないし2回めでできた。
- 0 実際には正確に反応できなかったが、2回め、3回めでは始めよりよくなった。
- どちらかというとうまくいかなかった。多分非常な恥しさと不安のせいであろう。勇気づけが必要。
- リズム・パターンを覚えることが困難、同様に身体運動のバランスに問題がある。また両親のそばから離れるのを不安がっていることも考えられる。楽にリズム反応ができるようにしていくためには、いろいろな経験ができる機会を作っていくことが必要と思われる。

学齢期前の音楽基礎能力テスト

(資料 I)

パート I

リズム反応および身体運動のバランス

1. まず次のリズムを、あなたが手拍子でたたいてみせます。・発育の程度により、子どもはその通りのリズムをたたいてあなたに伝えるかもしれませんが、あるいは、あなたがいっしょにたたいてあげた方がよい場合もあるかもしれません。子どもを励まし、何よりもこれが愉快的な経験となるようにしてください。1回めには何の反応も示さない子どもがいるかもしれませんが、その場合は2回め、3回めでは何らかのリズム反応が得られるかどうか、くり返したたいてみせます。1回めがうまくいった場合でも、2回めも正確に応えられるかどうか試してみてください。また、最初はうまくいかなかったとして、2回めでは前回よりよくなったかどうかにも注意してください。この反応(あるいは無反応)を記憶しておいて、次に2つめのリズムをたたき、同じような手順をとります。この様子も、また記憶にとどめておき、次へ進んでください。

2. 子どもがあなたといっしょに歩けるかどうかをみます(部屋の中を歩きまわってもよいし、1箇所ですり足踏みしてもよい)。歩きながら1歩ごとに手拍子をたたいてみせます。子どもがこれを簡単そうにやるか難しそうにやるかに注目してください。これもゲームのようにやり、ためらったり難しがったりしないよう元気づけてやります。

パン・パン・パン・パン(手拍子)

トン・トン・トン・トン(歩く)

ここまでで、あなたにはその子どもの総体的な成長度合いを知ると同時に、リズム反応の様子や、手足の運動の均等状態などもわかっていなくてはなりません。これらの反応は、面接のすぐあと、記録しておいてください。

パート II

音高の識別

1. 子どもに、ピアノの中央の黒鍵が“ふたあつ”並んだところを教えます。最初の音、それから2つめの音をひとさし指で弾きその鍵盤の上の手の動きを子どもによくみせるようにします。



これをくり返し、子どもにもあなたのやったとおりのことをするようにうながします。子ども

は全部の指，あるいは何本かの指を使って弾くでしょう。この最初の反応が容易そうであったか
難しそうであったか，記憶しておいてください。

2. 子どもによそを見させておいて，もう1度次の音を弾いてきかせます。



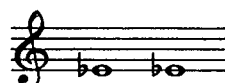
それから鍵盤の方にふりかえらせて，あなたが弾いたとおりに両方の音が弾けるかどうかみま
す。もしできなければ，この手順を最初からくり返して，子どもにもう1度試みさせます。3回
やってみた後，この反応を記憶にとめておいてまた次へ進んでください。

3. もう1度よそを見させておいて，今度は次の順番で音をきかせます。



何回かやってみて，また子どもの反応を記憶しておきます。

次にもう1度，今度は2つめの音をくり返し音にしてきかせます。



子どもが間違えた場合にはもう1度弾いてやり，間違いをただすことができるかどうか見てく
ださい。この3つめの反応も，前回と同様に記録しておきます。

学齢期前の音楽基礎能力テスト（記録用紙）

パートⅠ－リズム反応と筋肉調整（それぞれの欄のひとつをまるで囲む）

例 1		例 2	
リズム反応	筋肉調整	リズム反応	筋肉調整
++	++	++	++
+	+	+	+
0	0	0	0
-	-	-	-
--	--	--	--

記 録 事 項

パートⅡ－音の高低の識別（2回まで試みたら，いずれかひとつをまるで囲む）

例 1	例 2	例 3
++	++	++
+	+	+
0	0	0
-	-	-
--	--	--

記 録 事 項

総評および特記事項

3. 結果と考察

3.1 リズム反応および身体運動のバランス

音楽的反応は、自由でしかも統一ある身体的反応を通じて発達すると言われるように、音楽の演奏には筋肉が自由に動くことが大きな条件となる。従って系統性ある音楽教育を行なう最初の段階である幼児期の音楽的な活動は、保育者がまずその時点の各々幼児に内在している音楽的素地が何かあるかどうかを知ることから始まると考える。このような観点からリズム反応上は「――」と「―――」のリズム型の識別およびこのリズム型を手拍子で再現できる関係を示したものである。(表 I)。

ここでのリズム型の識別とは、リズム構成要素である音の長短識別の段階で捉える。身体運動とは、幼児がうたったり楽器で音を出したりする場合の音楽的作業条件の筋肉調整を意味する。

リズム反応 I (表 I-A) では、(++) の水準の幼児が 68.8%, (+) の水準の幼児が 18.8% である。すなわち 1 回目で正確に識別できる、多少困難さはあったが 1～2 回目で識別できる幼児を合わせると全体の 87.6% に達している。そして識別が

(表 I-A) リズム反応 I

	リズム反応			筋肉調整		
	男児 n	女児 n	計 n (%)	男児 n	女児 n	計 n (%)
++	11	11	22(68.8)	7	6	13(40.6)
+	1	5	6(18.8)	3	6	9(29.1)
0	1	1	2(6.3)	1	2	3(9.4)
-	0	2	2(6.3)	0	3	3(9.4)
--	0	0	0(0)	2	2	4(12.5)

「――・―――」

困難であると見られる幼児は 0% である。4 才児では、音楽の基礎であるリズム的要素の感覚反応は全体的傾向としてほぼ全幼児ができるかと判断される。

次にリズム反応で識別できたものを手拍子で再現することによって、身体機能の筋肉調整とのバランスで調べた。その結果、(++) の水準の幼児が 40.6%, (+) の水準の幼児が 28.1% である。すなわち 1 回目で正確に再現できた、多少困難さはあったが 1～2 回目で再現できた幼児を合わせると全体の 68.7% となっている。これは村山らのリズム型再生調査とはほぼ一致した。従って全体的傾向としてはリズム反応識別ができていても筋肉調整がうまく機能せず、反射的にリズム再現をするのに多少時間を要する幼児が約 20% 程度いると推察する。

一方、音の長短識別ができていてもリズム型を覚えることが困難、同時に筋肉調整のバランスに問題がある幼児(――)が 12.5% いることは留意すべきことと思われる。これらの幼児はすでに音の長短識別はできていることから、指導上他の幼児に比べてこの点の音楽経験活動により多くの機会を与える配慮が重要であると考えられる。リズム反応 I と筋肉調整の相互関係で調査した結果(表 I-B)で示すように全幼児 32 名中 17 名(53.1%)の幼児が、音の長短識別とその筋肉調整のバランスが一致している。特に(+++)の高い水準で一致する幼児が 40.6%, (+) の水準で一致する幼児が 9.4% と計 50% の幼児が高い水準で一致している。また(――)の低い水準で一致する幼児は 0 名である。

リズム反応 I と筋肉調整の相互関係が一致しない様子を示したものが(表 I-C)である。その結果、リズム反応と筋肉調整の相互関係に不均衡差が見られた幼児が全体の約 47% になって

いる。そしてこれらの幼児全員はリズム反応が筋肉調整に比べて水準が上回っている。逆にリズム反応が筋肉調整に比べて劣っていると見られる幼児は0名であった。なお、ここでは相互関係を得点化することにより、内容の実態把握の検討を試みた。得点差が大きいほど、リズム反応と筋肉調整の相互関係不均衡の差が大きいことを意味するものである。

リズム反応が(++)・(+), 筋肉調整が(+・(0)で点差1~2の高い水準の幼児が全体で約28%である。またリズム反応が(0)・(-), 筋肉調整が(--)で点差1~2の低い水準の幼児が全体で9.4%見られた。相互関係不均衡の差が得点で3の幼児が女児1名, 4の幼児が男児に1名いた。点差の平均値は男児2, 女児1.4と男児の方に不均衡差が大きいと言える。

この調査の実施にあたって保育者が、リズム型を言語化することは出来るが、身体機能が思うようについていけないと判断出来る幼児が何人か見られた、と報告しているように、感覚面での発達に比較して機能面がわずかに劣っている。すなわちこの時期で音の長短識別ができることは、音楽でのリズム要素の内的蓄積が非常に大きい時期と考えられるが、その内的蓄積を基礎として音で表現するまたは表出する筋肉調整がまだ未発達の状態にある幼児が何人かいるという結果となる。

リズム反応IIは、[-----]のリズム型の識別およびこのリズム型を足踏みまたは行進しながら手拍子で再現する関係を、示したものである(表II)。

ここでのリズム型は楽曲構成上の拍との関わりで調査した。音楽には種々なリズムが使用されるが、それらのリズムは単に雑多に無秩序に使用されているわけではない。必ず一定の時間ごとに刻まれる拍の単位上にリズムが乗ることにより、最小限の秩序が生まれてくる⁹⁾。そしてそれをさらに構成していくものが拍子である。

(表II-A)では(++)の幼児34.4%(+)の幼児34.4%と1回目で正確に識別できる、多少困難さはあったが1~2回目で識別できる幼児を合わせると全体の68.8%の幼児に達している。そして、識別が困難と見られる幼児(--)が6.3%いた。リズム構成はリズム反応Iに比較し

(表I-C) リズム反応と筋肉調整の相互関係不一致

リズム 反 応	筋肉 調 整	男児 n	女児 n	計 n(%)	得点差
++	+	2	4	6(18.8)	1
++	0	1	0	1(3.1)	2
++	-	0	1	1(3.1)	3
++	--	1	0	1(3.1)	4
+	0	0	2	2(6.3)	1
+	-	0	1	1(3.1)	2
0	--	1	1	2(6.3)	2
-	--	0	1	1(3.1)	1

得点化(++)5, (+)4, (0)3, (-)2, (--)1, ()は全幼児数における%

(表I-B)リズム反応と筋肉調整相互関係一致

	男児 n	女児 n	計 n(%)
++	7	6	13(40.6)
+	1	2	3(9.4)
0	0	0	0(0)
-	0	1	1(3.1)
--	0	0	0(0)

()内は全幼児数における%

(表II-A) リズム反応II

	リズム反応			筋肉調整		
	男児 n	女児 n	計 n(%)	男児 n	女児 n	計 n(%)
++	3	8	11(34.4)	1	3	4(12.5)
+	5	6	11(34.4)	2	6	8(25.0)
0	4	1	5(15.6)	2	3	5(15.6)
-	0	3	3(9.4)	3	2	5(15.6)
--	1	1	2(6.3)	5	5	10(31.3)

[-----]

て拍の単位の繰り返し音で単純化されている。しかし、足踏みまたは行進しながら手拍子をするという身体的機能条件が大きいことから、幼児にとっては全体的に識別力が下がるという結果となった。

次にリズム反応で識別できたものを足踏みまたは行進しながら手拍子でリズム型を再現することによって、身体機能の筋肉調整とのバランスで調べた。その結果、(++)の水準の幼児が12.5%，(+)の水準の幼児が25%である。すなわち1回目で正確に再現できた、多少困難さはあったが1～2回目で再現できた幼児を合わせると37.5%と（表Ⅰ-A）に比べてほぼ半数となった。

一方、どちらかというとうまくいかなかった(－)，リズム型を足踏みまたは行進しながら手拍子で再現することが困難と思われる(－－)幼児が全体の46.9%となり（表Ⅰ-A）に比べて約2倍に増えている。従って4才児では、リズム反応が出来ていても手拍子と足踏みや行進等と同時にこなつてのリズム再現はかなり困難ではないかと推察される。これは、この時期においてはまだ音楽の時間的流れに乗ることの難しさを示すものと考ええる。

リズム反応Ⅱと筋肉調整の相互関係で調査した結果（表Ⅱ-B）で示すように全幼児32名中10名（31.3%）の幼児がリズム識別と筋肉調整のバランスで一致している。特に(++)の高い水準で一致する幼児が12.5%，(+)の水準で一致する幼児が9.4%と計21.9%の幼児が高い水準で一致しているがこれは（表Ⅰ-B）に比べて半数弱となっている。また(－－)の低い水準で一致した幼児が男児1名、女児1名に見られた。この幼児はリズム反応、手による再現、足による再現と個別には出来るが、同時に3つの諸機能を動かす場合の相互均衡が、他の幼児に比べてやや未発達であると推察される。

リズム反応Ⅱと筋肉調整の相互関係が一致しない様子を示したものが（表Ⅱ-C）である。その結果、リズム反応と筋肉調整の相互関係に不均衡差が見られた幼児が全体の約70%に達し、（表Ⅰ-C）に比べて約1.5倍増えている。しかしこの幼児全員はリズム反応Ⅰの場合と同様に、リズム反応が筋肉調整に比べて水準が上回っている。逆に、リズム反応が筋肉調整に比べて劣っていると見られる幼児は0名であった。なお、ここではリズム反応Ⅰの場合と同様に、相互関係の得点化を計ることによって、内容の実態把握の検討を試みた。得点差が大きいほど、リズム反応と筋肉調整の相互関係不均衡の差が大きいことを意味するものである。

リズム反応が(++)・(+), 筋肉調整が(+)

(0)で点差1～2の高い水準の幼児は全体で約28%で、（表Ⅰ-C）とほぼ同数の結果となった。またリズム反応が(0)・(－), 筋肉調整が(－)・(－－)で点差1～2の低い水準の幼児が全

（表Ⅱ-B）リズム反応と筋肉調整相互関係一致

	男児 n	女児 n	計 n (%)
++	1	3	4(12.5)
+	1	2	3(9.4)
0	1	0	1(3.1)
－	0	0	0(0)
－－	1	1	2(6.3)

() 内は全幼児数における%

（表Ⅱ-C）リズム反応と筋肉調整の相互関係不一致

リズム 反 応	筋肉 調 整	男児 n	女児 n	計 n (%)	得点差
++	+	1	4	5(15.6)	1
++	0	1	0	1(3.1)	2
++	－	0	1	1(3.1)	3
+	0	0	3	3(9.4)	1
+	－	3	1	4(12.5)	2
+	－－	1	0	1(3.1)	3
0	－－	3	1	4(12.5)	2
－	－－	0	3	3(9.4)	1

得点化(+++)5, (++)4, (0)3, (－)2, (－－)1, () は全幼児数における%

体の21.9%に見られた。これは(表Ⅰ-C)の結果と比較すると約2.3倍に増えている。点差が3という幼児が男児に1名、女児に1名見られた。点差の平均値は男児2、女児1.4とリズム反応Ⅰとはほぼ同様に、男児が女児に比べて不均衡の差が大きいと言える。

以上、リズム反応および身体運動のバランスについて、年中クラスの初期段階では、個々の幼児が極短かい断片的なリズム型の再現はできるものの、集団で拍に合わせて行なう音楽的な活動にはまだ困難があると思われる。

リズム感は、人間の体の自然な動きに現われることからわかるように、先天的に具わっている感覚とも言われるが、それはまた適当な訓練によって発達するものでもある。幼児期では、まずその幼児がリズム再現をいかに上手に行なうかではなく、リズムに対してどのような反応を示したか、保育者の幼児観察の重要性が求められる最初であると考えられる。

音楽要素の一つにあげられるリズムの定義は様々であるが、音の長短は時間的性質に関する拍やアクセント、小節等すべてを包括するもので、音の高さに関する性質とは対立するものである。そのリズムの根底となる音の長短識別反応は、その幼児にとってこれからの音楽活動に大きく影響を与えていくものと考えられる。実際の音楽上では、原始音楽に始まり、ジャズや現代音楽に至るまで、表現手法の一つとしてリズムだけの音楽が成立し得るが、これに対して旋律や和声からリズムを除くことは音楽的には全く成立しない⁽¹⁰⁾。

3.2 音高の識別

長二度音程 (Db・Eb) 間の音高識別を、ピアノ中央の鍵盤 (黒鍵) を用いて、主に視覚的な面から模倣および再生する幼児の様子を実態調査したものを (表Ⅲ-A・識別Ⅰ) に示す。同様に高低二音間 (Db・Eb) の音高識別と、同音二音間 (Db と Db・Eb と Eb) の音高識別を主に聴覚的な面から再生する幼児の様子を実態調査したものを (表Ⅲ-A・識別Ⅱ) および (表Ⅲ-A・識別Ⅲ) に示す。ここでの音高の識別とは、音楽上の旋律構成要素である音の高低識別の段階で捉えるものである。

(表Ⅲ-A・識別Ⅰ) で示すように、Db・Eb 音を視覚聴覚の両面から模倣しながら音の再生をする場合は、(++)の水準の幼児が40.6%，(+)の水準の幼児が40.6%，合計全幼児の81.2%が音高識別できている。しかし、どちらかというとうまくいかなかった (－) に男児1名、音高識別することが困難である (－－) に男児2名見られたことは留意すべきことと思われる。

(表Ⅲ-A・識別Ⅱ) は二音低高を聴覚的な面からの識別で調査したものである。この結果から (++) の水準の幼児が15.6%，(+)の水準の幼児が28.1%となり全幼児の43.7%となった。これは (表Ⅲ-A・識別Ⅰ) に比べて約半数である。また (－) の水準の幼児が15.6%，(－－) の水準の幼児が6.3%である。すな

わち、どちらかというとうまくいかなかった、音高識別することが困難であると判断される幼児が全体の約22%となり (表Ⅲ-A・識別Ⅰ) に比べて約2倍強という結果となった。

(表Ⅲ-A・識別Ⅲ) では二音高低および同音繰り返しを聴覚的な面からの識別で調査した。この結

(表Ⅲ-A) 音高の識別

	識 別 Ⅰ			識 別 Ⅱ			識 別 Ⅲ		
	男児 n	女児 n	計 n(%)	男児 n	女児 n	計 n(%)	男児 n	女児 n	計 n(%)
++	6	7	13(40.6)	3	2	5(15.6)	3	1	4(12.5)
+	4	9	13(40.6)	2	7	9(28.1)	1	4	5(15.6)
0	0	3	3(9.4)	2	9	11(34.4)	2	8	10(31.3)
－	1	0	1(3.1)	4	1	5(15.6)	3	6	9(28.1)
－－	2	0	2(6.3)	2	0	2(6.3)	4	0	4(12.5)

果から(++)の水準の幼児が12.5%，(+)の水準の幼児が15.6%となり全幼児の28.1%となった。これは(表Ⅲ-A・識別Ⅰ)に比べて約三分の一の人数である。また(－)の水準の幼児が28.1%，(－－)の水準の幼児が12.5%で合計全幼児の40.6%となり，(表Ⅲ-A・識別Ⅰ)に比べて約4.3倍に増えているという結果が得られた。

4才のこの時期では，音を聞きその音を模倣によって再現することは容易であるが，音を聞いて識別出来ていても，自らその音を再現する作業は困難と考えられる。

同音二音繰り返しに比べて高低二音は音程変化の区別があり，幼児にとっては識別しやすいことが明確となったが，二音程は低音から高音への音進行が，高音より低音への音進行に比べて理解しやすかったと考えられる。

さらに識別Ⅰ・識別Ⅱ・識別Ⅲの相互関係で一致をみたものを(表Ⅲ-B)に示す。

(表Ⅲ-B) 識別Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの相互関係一致

	男児 n	女児 n	計 n (%)
++	3	1	4(12.5)
+	0	1	1(3.1)
0	0	1	1(3.1)
－	0	0	0(0)
－－	2	0	2(6.3)

視覚聴覚の両面からの一致は幼児全体の25%であるが，その中で困難であると判断された幼児が6.3%いた。また女児に比べて男児は，非情に高い水準(++)での一致が3名，非常に低い水準(－－)での一致が2名と極端な差が出た。音高に対する識別については女児に比べて男児の方が発達差が大きいものと考えられる。

識別Ⅰ・識別Ⅱ・識別Ⅲの相互関係が一致しない様子を示したものが(表Ⅲ-C)以下である。なおここでは，リズム反応および身体運動のバランスの場合と同様に，相互関係を得点化してその実態把握の検討を試みた。

() 内は全幼児数における%

(表Ⅲ-C) 識別Ⅰと識別Ⅱ・Ⅲの相互関係不一致

I ≠ II-III	男児 n	女児 n	計 n (%)	得点差
++ +	1	2	3(9.4)	1
++ 0	0	2	2(6.3)	2
++ -	1	0	1(3.1)	3
+ 0	1	3	4(12.5)	1
+ -	1	0	1(3.1)	2
0 -	0	1	1(3.1)	1

得点化(++)5，(+)4，(0)3，(－)2，(－－)1，()内は全幼児数における%。－は一致，≠は不一致

(表Ⅲ-C)は識別Ⅰ・識別Ⅱ・識別Ⅲの相互関係が不一致と見られた幼児を示している。識別Ⅰが(++)または(+)，識別Ⅱ・識別Ⅲが(+)または(0)の水準で点差1～2の高い水準での不一致が全幼児の28.2%であり，男児2名，女児7名と圧倒的に女児の水準が高い結果となった。識別Ⅱ・識別Ⅲが(－)で点差1～3の水準で不一致の幼児が全体で9.3%いる。

識別Ⅰが識別Ⅱ・識別Ⅲの水準を上回り，その逆の結果は得られなかった。平均値は男児1.75，女児1.25と男児の方に不均衡差が大きく，これはその幼児自身の音楽的要素の内面蓄積部分でも女児に比べて男児の方に発達差が大きいと考えられる。

(表Ⅲ-D)は識別Ⅰと識別Ⅱでは相互関係が一致しているものの識別Ⅲでは相互関係が不一致と見られた幼児を示している。この様な状態の幼児は全体の約22%で，識別Ⅰ・識別Ⅱ・識別Ⅲの相互関係一致が見られた幼児(表Ⅲ-B)とほぼ同数に近い結果となった。これは視覚聴

(表Ⅲ-D) 識別Ⅰ・Ⅱと識別Ⅲの相互関係不一致

I - II ≠ III	男児 n	女児 n	計 n (%)	得点差
++ +	0	1	1(3.1)	1
+ 0	1	1	2(6.3)	2
+ -	0	2	2(6.3)	2
0 -	0	1	1(3.1)	1
- -	1	0	1(3.1)	1

() 内は全幼児数における%

覚両面でわずかな不一致が見られた程度と考えられる。

識別Ⅰ・識別Ⅱが(++)または(+), 識別Ⅲが(+)または(0)の水準で一致しない幼児は全体の9.4%である。また識別Ⅲが(-)または(--)の水準で不一致の幼児が全体の12.5%である。幼児にとっては、音識別の感覚部分でも、高低識別が同音識別よりも容易であるものと判断される。しかし各相互間の点差は1~2で非常にわずかな差である。

(表Ⅲ-E)は識別Ⅰ・識別Ⅱ・識別Ⅲの相互関係不一致であると見られた幼児を示している。これは全幼児の15.6%で、相互間の各不一致の点差は1~2とわずかな数を示している。

なお、識別Ⅰと識別Ⅲの相互関係一致で、識別Ⅱのみ不一致であると見られた幼児はいない。いずれにせよ音高識別では全幼児の75%が、視覚聴覚両面で不一致状態にあるという結果を得た。

この調査にあたって保育者は、ほとんどの幼児は弾くのを見て正確に模倣することが出来たが、聞き分けだけによる音再生に困難が見られ、識別Ⅱ・識別Ⅲは正確に出来た幼児は少なかったと報告している。音高識別力は模倣しながらの音再生で視覚聴覚の両部分を使うとよく出来るが、幼児自身が聴覚部分のみに訴えて音高識別し、再生する作業は前者より困難となっている。従って旋律等をうたったり、ひいたりする場合は視覚部分と聴覚部分の両方を考慮しながら音楽活動を進める方が、幼児にとっては理解しやすいものと思われる。

村山らの報告にもあるように、幼児期に音の高低理解や旋律の記憶等が、歌をうたう場合や楽器をひく場合の必須条件となる。音の高低は音の長短に比べて人間の体の自然な動きの中から直接に結びつきにくい。保育者にとってはリズムよりも音高に関する幼児の発達状況は捉えにくいようである。幼児期の旋律理解とは、記譜されている旋律を正確に音再現することではないと考える。あらゆる音楽の旋律は音の時間的な順次進行により上向進行・下向進行・平行進行から成立している。幼児期に音高識別能力が高いということは、音楽的には視覚部分と聴覚部分の両面から旋律の方向性理解がまず出来る時期であると考ええる。

3.3 リズム反応と音高識別の関連

音の長短識別と高低識別の相互関係で調査したものが(表Ⅳ-A)と(表Ⅳ-B)である。音の長短と高低の関係は前述した旋律の方向性に加えて、旋律の構成理解能力への関連につながるものである。

リズム反応Ⅰと音高識別Ⅰの相互関係で調査した結果(表Ⅳ-A)で示すように全幼児32名中11名(34.4%)の幼児に一致が見られた。そしてこの幼児は(++)および(+)の高い水準で一致している結果であった。(0), (-), (--)の低い水準での一致は0名であった。また男児, 女児では男児の方に(++)が6名と水準が高いことが示されている。

リズム反応Ⅰと音高識別Ⅰの相互関係が一致しない様子を示したものが(表Ⅳ-B)である。

なおここでも相互関係の得点化を計ることにより内容の実態把握の検討を試みた。

リズム反応が(++), 音高識別が(+)で点差1の高い水準の幼児は全体の31.3%である。また反対にリズム反応が(+), 音高識別が(+++)で点差1の高い水準の幼児は全体の9.4%で合計40.7%の幼児はやや不一致が見られるものの高い水準で旋律構成の理解能力があると判

(表Ⅲ-E) 識別Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの相互関係不一致

Ⅰ≠Ⅱ≠Ⅲ			男児 n	女児 n	計 n (%)	得点差
++	+	0	0	1	1(3.1)	1-1
++	0	-	1	0	1(3.1)	2-1
+	0	-	0	2	2(6.3)	1-1
+	-	--	1	0	1(3.1)	2-1

断される。さらにリズム反応、音高識別ともに(0)で点差1～2の水準まで含めると全幼児の50%に達する。

ここで注目すべきことは、リズム反応が音高識別に優っている幼児は15名(男児7名・女児8名)であったが音高識別がリズム反応に優っている幼児は女児のみ6名で男児は0名という結果であった。リズム反応が音高識別より優っている幼児は、音高識別がリズム反応より優っている幼児の約2.5倍となっている。

この調査にあたって保育者は、リズムや旋律そして楽器に対する興味を最も示す時期であると思われた。また導入の大切さを改めて感じた等の報告をしている。

4才児は音楽的基礎の概念認識、音楽的思考の過程が始まると同時に、各幼児が自己を音によって表現しようとする最初の時期であると推察された。

(表IV-A) リズム反応Iと音高識別Iの相互関係一致

	男児 n	女児 n	計 n (%)
++	6	3	9(28.1)
+	0	2	2(6.3)
0	0	0	0(0)
-	0	0	0(0)
--	0	0	0(0)

()内は全幼児数における%

(表IV-B) リズム反応Iと音高識別Iの相互関係不一致

リズム 反 応	音高 識 別	男児 n	女児 n	計 n (%)	得点差
++	+	4	6	10(31.3)	1
++	0	0	1	1(3.1)	2
++	-	1	0	1(3.1)	3
+	0	0	1	1(3.1)	1
+	--	1	0	1(3.1)	3
0	--	1	0	1(3.1)	2
+	++	0	3	3(9.4)	1
0	++	0	1	1(3.1)	2
-	+	0	1	1(3.1)	2
-	0	0	1	1(3.1)	1

得点化(++>5, (+>4, (0)3, (->2, (-->1, ()内は全幼児数における%

4. お わ り に

瞬間に消えていく音を素材として構成される音楽は間違いとすることが明確化されにくい。そのために音楽教育においては、人間性の育成や音楽美の享受というような観念的なねらいになり過ぎて、その過程よりも結果だけで評価されることが多い。しかし、4才児頃から音を通しての自発的な自己表現が生まれてくる幼児期は、これらを根底として、音楽的な感性を養うと同時に音楽概念の思考的な部分も、視覚・聴覚・筋肉調整という身体的均衡を保ちながら理解させていくことが必要である。そして、その過程の中から各幼児に内在する音楽的な創造力が育つものと考え。保育者が幼児に如何に指導したらよいのかということではなく、何を指導するかという本質的な問題を問うことになると言える。

冒頭に述べたように、今回の調査は4才児の音楽的背景の実態をクラス全体傾向という大枠で捉えたが、本来は保育者が各幼児の実態を把握してきめ細かい指導が必要とされる。そしてその指導は音楽の系統性の上になければ、何の意義も持たないものである。本研究は、この問題解決への多少なりとも有効な手がかりとなれば幸いである。

調査実施にあたり、幼児が音に合わせて歩いたり手拍子をしている状態が、拍子やリズムに合っているかどうかの判断は非常に難しく、実際は音に幼児の動作が合うよりも、幼児の動作に音を合わせる場合が多く、この点については今後の検討課題であると考え。

参 考 文 献

- (1) 坂元彦太郎編 『幼稚園教育要領解説』 フレーベル館, 1964.
- (2) Pace, R. 『Music for Moppets』 Lee Roberts Music Publication, 8, 1972.
- (3) 呉曉 『ソルフェージュからピアノへ——4・5才児の指導——』 音楽之友社, 14, 1987.
- (4) J. L. マーセル, 美田節子(訳) 『音楽教育と人間形成』 音楽之友社, 110, 114, 1971.
- (5) 桐朋幼稚園刊 『音楽性自主性集団性の育ちの追及』 (3)変遷上で特に重要な記録に記載されたものより引用, 35, 1987.
- (6) ロザムンド・シューター, 貫行子(訳) 『音楽才能の心理学』 音楽之友社, 1977.
- (7) 村山貞雄編 『日本の幼児の成長発達に関する総合調査』 サンマーク出版, 1987.
- (8) Pace, R. 『Music for Moppets, Pre-School musical background test』 Lee Roberts Music Publication, 1972.
- (9) 石桁・末吉・丸田・飯田・金光・飯沼 『楽典』 音楽之友社, 1979.
- (10) 久保田芳枝 『こどもとリズム』 れんが書房, 1973.

Musical Ability of Kindergartners

—From the Musical Concept—

Miwako OYAMA

ABSTRACT

In the Current Course of Study in Preschool Education "Music" is defined under the category of "Musical Phythm" as an activity of expression. The importance of starting musical education in early childhood has been recognized for a long time now. Neadless to say, this does not mean that musical expression in eary childhood should be similar to the musical performances of adults.

In recent years music has also become a lively subject of study in field of early childhood education and its content, while tending toward uniformity, has reached a higher level. On the other hand, in children's musical activities it is necessary to take into consideration the "musicalization" of children's daily life experiences. However, due to the mingling of daily life feelings with the beelings that make up the music, this may easily produce a weakening of the musical elements in children's musical activities. Under these circumstances, how to deal with music while taking children's growth and development into account has become a big problem to educators.

The object of this study is to conduct an actual survey of the degree of growth in balance of body movements, rhythmic respnse and fundamental development of the ear and to examine the musical background of children by giving preschool children a test in fundamental musical abilities.

The main results of the study are as follows:

- (1) In the test for rhythmic response and balance of body movements almost all children were found to have the ability to distinguish the length of sounds and good rhythmic feeling was confirmed. But about 20% of the children were found to have difficulty in reproducing rhythms.
- (2) In the test for pitch recognition almost all the children were found to have the ability of recognition and good melodic feeling was confirmed. But in the reproduction of pitches a little over 50% of the children were found to have difficulty when relying on hearing alone. Thus, the imbalance between senses and function was greater than in the case of rhythmic response.
- (3) It is seen from this study that in early childhood imbalance between senses and function is great in respect of development but almost no imbalance is found in the relationship between rhythmic feeling and melodic feeling in respect of response.